

Title	元朝秘史と現代ハルハ蒙古語(1) : 接尾語「禿」, 「台」について
Author(s)	小貫, 雅男
Citation	大阪外国語大学学報. 16 p.229-p.251
Issue Date	1966-03-25
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80264
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

元朝秘史と現代ハルハ蒙古語（1）

接尾辞「秃」，「台」について

小 貫 雅 男

The Secret History of the Mongols and Khalkha Mongolian (1)

——On the suffixes, “秃” and “台”

Masao Onuki

I think traditional Mongolian researches have been insufficient in the following points: first, in studying more of the present living language and considering the past classics through its system—the cross-section at that time; secondly, in studying furthermore the past classics and grasping the vector phase in the course of time along the main current of the history by combining tightly the cross-section at that time with that of the present. Only through advancing the study in the direction, it will be possible to research into the problems that have been difficult to solve.

In this treatise, I have tried my hardest to conquer the insufficiency of the two points above-mentioned. In the chapters 2 and 3, I have made my exertions to advance my thought, paying my attention to the following points. That is, I try not to be bound by traditional views, but to establish a method only in accordance with the concrete linguistic fact.

The order of discussion in this treatise is to treat of the outline of the suffixes, “秃” and “台”, and to make clear their principal position in the system of modern Khalkha Mongolian in chapter 1. In the next chapter, these suffixes are studied synchronically on the cross-section at the times of the Secret History of the Mongols. And in chapter 3, I go on to illuminate the synchronic linguistic facts grasped in the preceding chapter by comparing them with those in modern Khalkha Mongolian from the cubic view-point.

This subject is selected as the starting point of establishing the history of the Mongolian language, and I will keep on studying other categories from the same point of view from now on.

は じ め に

言語の内的歴史は、言語外に位置する社会の土台とそれに照応する上部構造の歴史的発展過程のなかで、大きく影響を受けてきたことは疑いないところであるが、言語の内的構造に規定されている部分があることを認めなければならない。また、この部分の研究が具体的に充分なされて、はじめて、言語外との有機的で、しかも総合的な研究を可能にするものと確信する。このような観点から、ここでは言語の内的歴史、就中蒙古語史の確立への出発点として、本論題を選んだ。

従来の蒙古語研究は、現時の生きている言語を研究し、その体系、即ち、その時点における横断面を通して、過去の文献に視線を向け、考察するという点、あるいは、過去の文献を研究し、その時点での横断面と現代のそれとを固く結合することによって、歴史的・時間的な流れの軸に、そのベクトルの相を把握し、解決困難な問題をも解明していくという点で、まだ充分であるとは云えない。

本論題を「元朝秘史と現代ハルハ蒙古語」として、2時点を設定したのも、上述の方法における不十分さを克服するためである。当分、この論題のもとに、すべての重要な範疇の個々について、歴史の縦の軸にそって考察をつづけるのであるが、本稿においては、その一環として、接尾辞「禿」、「台」を扱った。本稿を進めるに際して、特に従来の方法における不十分さの克服に力を入れ、また、第2章、第3章においては、従来の見解には拘束されずに、具体的な言語事実にのみ則して、方法を確立し、それに基づいて考察を進めるよう努力したつもりである。ここで確立される方法は、次の範疇に発展的に適用されるべきものであり、また、範疇の特殊性・具体性は、更に方法を創造的に発展させることは必然であろう。

本稿の構成は、第1章において、本稿で扱う接尾辞の概説を行い、現代ハルハ蒙古語の体系の中での位置を概ね明確にして、後の章を進めるのに役に立つようにした。第2章においては、元朝秘史の時点での横断面における、この接尾辞についての共時的考察である。text には、清の文廷式鈔本を底本とする葉德輝刊行の「元朝秘史」12巻本のもの、Академия Наук СССР Институт Народов Азии から出版された15巻本元朝秘史の写真版を使い、正集10巻を網羅的

に調べ、その文例は、第2章B表の各欄（nA₁～nC₄）に従って分類した。第3章は、前章の元朝秘史の時点での横断面における考察によって把握された共時的言語事実に対して、更に現代ハルハ蒙古語を比較することによって、立体的視点からの照明を与えようとするものである。そのことによって始めて、接尾辞「禿」,「台」の歴史的発展過程を辿り、現代ハルハ蒙古語におけるこの接尾辞の占める位置とそのベクトルを明確にすることが可能であろう。

1

この章では、本稿で扱う接尾辞の、現代ハルハ蒙古語の全体の中での位置を概ね明確にして、後の章を進めるのに役に立つようにした。したがって、本章は、不十分な点も、より本質的な側面の考察も、第2章の元朝秘史の研究をまっけて、第3章において深められる性質のものである。

(1)

接尾辞「禿」,「台」は元朝秘史にあらわれている形であって、現代ハルハ蒙古語においては、それらはそれぞれ、「-т」,「-тай (-той, -тэй)」の形であらわれている。「-т」,「-тай (-той, -тэй)」の両者の間の差異については重要な問題を含んでいるので、ここではふれずに、第2章、第3章において歴史的過程の中で明らかにしたい。

さて、現代ハルハ蒙古語には、7つの基礎母音があるが、これらを1942年の文字改革以後、ロシア文字を基に改良した а, о, э, ө, у, ү, и の7母音字によって示している。Ш.Лувсанвандан: Монгол хэлний зүйн сурах бичиг. 1956 Улаанбаатар. улсын хэвлэл.によれば7母音字の示す概略的な音価を次表の如く記してある。

(A表) Эгшиг авианы хүснэгт

	хэлний угийн язгуурын		хэлний урдуурхи	
	уруулын биш	уруулын	уруулын биш	уруулын
уйтан		у	и	ү
днуд		о	э	ө
уужим	а			

これらの母音は、男性母音:а, о, у 女性母音:э, ө, ү 中性母音:и の三系列に分れるのであるが、この中では、男性の諸母音と女性の諸母音とは、一語中に共存しないが、中性母音は男女いずれの母音とも共存し得るのである。上記の母音表に照してみると、男性母音は奥舌母音に統一され、女性母音は前舌母音に統一されているのが注目される。さて、元に戻って、この接尾辞

の -тай, -той, -тэй の三形の関係であるが, -тай は男性母音から o 母音を除外した他の a, y の母音を含む語に接尾され, -тэй は э, ү, ө を含む語に接尾され, -той は o 母音を含む語に接尾される。さらに詳しくは母音配列の規則に照らして述べなければならないが, 本論の筋から離れるので, ここでは原則のみにふれておくことにする。結局, この接尾辞の -тай, -той, -тэй の三形は母音調和による交替形なのである。元朝秘史においては, 文字の上ではこの母音調和による3つの交替形は区別されず, 「台」のみによって表記されている。

(2)

接尾辞 -тай (-той, -тэй) は, 形容詞形成の接尾辞の中でも, その機能において極めて重要であり, しかも現代ハルハ蒙古語においては, その頻度は他の辞尾辞を圧倒して大である。この節では, 形容詞形成の他の接尾辞についてもふれて, それらとの関係において, この接尾辞の形容詞全体の中での位置を明らかにしたい。また, その文法的機能についてもふれたい。

形容詞形成の接尾辞は, 現代ハルハ蒙古語においては, (n₁)~(n₃) および (v₁)~(v₇) の10種である。(n₁)~(n₃) は語基を名詞とするもので, 本論で扱う接尾辞 -тай (-той, -тэй) は (n₃) に分類した。(v₁)~(v₇) は語基を動詞語幹とするものである。以下それぞれについて簡単に例示していきたい。

(n₁) -рхаг (-рхэг, -рхог, -рхөг) [-лхаг (-лхэг, -лхог, -лхөг)]

-рхуу (-рхүү) [-лхуу (-лхүү)]

бая <n. 富> + -рхаг → баярхаг <a. 富んだ>

ус <n. 水> + -рхуу → усархуу <a. 水の豊富な>

сүр <n. 力> + -лхэг → сүрэлхэг <a. 力のある>

эр <n. 牡> + -лхүү → эрэлхүү <a. 勇敢な>

(n₂) -лаг (-лэг, -лог, -лөг)

давс <n. 塩> + -лаг → давслаг <a. 塩辛い>

чинээ <n. 力> + -лэг → чинээлэг <a. 富裕な>

тос <n. 油> + -лог → тослог <a. 油ぎった>

өвс <n. 草> + -лөг → өвслөг <a. 草の茂った>

(n₃) -тай (-той, -тэй)

угалз <n. 模様> + -тай → угалзтай <a. 模様のある>

амт <n. 味> + -тай → амттай <a. おいしい>

сонирхол <n. 興味> + -той → сонирхолтой <a. おもしろい>

- зориг <n. 大胆> + -той → зоригтой <a. 勇敢な>
- сэхээ <n. 知性> + -тэй → сэхээтэй <a. 知性のある>
- ичгүүр <n. 恥> + -тэй → ичгүүртэй <a. 恥かしい>
- (v₁) -уу (-үү)
- гаж <v. 屈曲する> + -уу → гажуу <a. 曲った>
- согт <v. 酔 払う> + -уу → согтуу <a. 酔払った>
- зүд <v. 疲れる> + -үү → зүдүү <a. 疲労した>
- эрг <v. 回転する> + -үү → эргүү <a. 愚かな>
- (v₂) -мгай (-мгий). -мтгай (-мтгий). мхай (-мхий)
- дас <v. 慣れる> + -мгай → дэсэмгай <a. 慣れた>
- ай <v. 恐れる> + -мтгай → аймтгай <a. 憶病な>
- даа <v. 堪える> + -мхай → даамхай <a. 辛抱強い>
- хэл <v. 語る> + -мгий → хэлэмгий <a. はきはきした>
- (v₃) -мал (-мэл, -мол, -мөл)
- цавч <v. 切る> + -мал → цавчмал <a. 切られた>
- хэрч <v. 刻む> + -мэл → хэрчмэл <a. 刻まれた>
- сонг <v. 選ぶ> + -мол → сонгомол <a. 選ばれた>
- гөр <v. 編む> + -мөл → гөрмөл <a. 編まれた>
- (v₄) -н, -нгуй (-нгүй)
- дүүр <v. 充ちる> + -н → дүүрн <a. 一杯の>
- дэлгэр <v. 拡がる> + -нгуй → дэлгэрэнгүй <a. 広い>
- (v₅) -хай (-хой, -хий). -нхай
- хагар <v. 裂ける> + -хай → хагархай <a. 裂けた>
- эвдр <v. 毀れる> + -хий → эвдэрхий <a. 毀れた>
- тур <v. 痩せる> + -нхай → туранхай <a. 痩せた>
- (v₆) -гар (-гор, -гөр, гэр)
- хаз <v. 曲がる> + -гар → хазгар <a. 曲がった>
- тов <v. 突出る> + -гор → товгор <a. 隆起した>
- цэл <v. 広くなる> + -гэр → цэлгэр <a. 広い>
- (v₇) -шгүй

халд <v. 侵害する>+ -шгүй→халдашгүй <a. 神聖な>

игг <v. 信ずる>+ -шгүй→иггэшгүй <a. 信用できない>

үнэл <v. 評価する>+ -шгүй→үнэлшгүй <a. 高価な>

以上10種の形容詞形成の接尾辞を概観したのであるが、(n₃)の接尾辞 -тай (-той, -тэй)の意義素は「～を持っている」であり、同系列の他の2つの場合(n₁), (n₂)は、いずれもその意義素は「～を豊富に持っている」という点で共通している。また、名詞を語基とするこの系列の3つのいずれの場合も、その意義素が「～を持っている」という点で一致しているのも、形容詞形成の接尾辞としては、語基を名詞としている以上、形容詞が実体の属性のうちで静止し、固定し、変化しないものをとらえて表現するものであるという性質上、当然そのようになって然るべきである。

(n₁)～(n₃) および (v₁)～(v₇) のいずれも重要であるが、なかでも(n₃)の接尾辞 -тай (-той, -тэй)は他の接尾辞を圧倒して、文法的機能においても発展している。また、あらゆる名詞にはほとんど制約を受けずに接尾し得るので、その頻度は極めて大きく広範に亘るので重要である。それだけに、他の接尾辞よりも、言語主体に生きている主観の分析意識が働いて、語基の名詞としての意義と接尾辞の意義素とが分析的に作用して、形容詞一語としての意識の稀薄なものの(A)から、濃厚なもの(B)へと、そこには極めて広い程度の段階が認められるのが特徴である。このことがまた、統辞論的にも、他の系列の接尾辞にはみられない多岐な発展を促しているのである。(A), (B) それぞれに属するものを例示すれば、

(A) に属するもの:

(1) морьтой<馬に乗っている～>←морь<n. 馬>+ -той

морьтой хүн<馬に乗っている人>

(2) малтай <家畜を持っている～>←мал<n. 家畜>+ -тай

малтай өвгөн <家畜を持っている老人>

(3) угалзтай <模様のある>←угалз <n. 模様>+ -тай

угалзтай дээл <模様のある外套>

(4) шимтэй <汁のある>←шим <n. 汁>+ -тэй

шимтэй жимс <汁気のある果物>

(B) に属するもの:

(1) сонирхолтой <おもしろい>←сонирхол <n. 興味>+ -той

сонирхолтой ном <おもしろい本>

(2) жигтэй <奇妙な>←—жиг <n. 異様>+-тэй

жигтэй зан заншил <奇妙な習慣>

(3) аюултай <おそろしい>←—аюул <n. 恐れ>+-тай

аюултай цаг <おそろしい時>

(4) амттай<おいしい>←—амт <n. 味>+-тай

амттай мах <おいしい肉>

いま列記した (A), (B) それぞれに属するものは、その文法的機能において限定的である場合の例として、例示したのであるが、それらは叙述的機能としても用いられる。叙述的用法として、(A), (B) それぞれから 1 例をあげる。

(A'): Энэ өвгөн дөрвөн малтай. <この老人は、四匹の家畜を持っている>

(B'): Энэ мах амттай. <この肉はおいしい>

言語使用に際して、具体的に活動する言語意識においては、(A') の場合は分析的、即ち「家畜を——持っている」であり、(B') の場合は「おいしい」である。そして、(B) および (B') は、それが一語として言語意識に訴えるが故に、形容詞における純度の高い位置を占めるのである。(n₃) の系列、即ち -тай (-той, -тэй) によって形成される形容詞の中に、このような (A)→(B) への段階性が認められながらも、この接尾辞が極めて活性であり、あらゆる名詞と反応する傾向を示めしていることは、その頻度を大きくして、現代ハルハ蒙古語の重要な特性の一つとなっているといえる。またそれは頻度においてのみではなく、文法的機能においても、多岐な発展を遂げている。副詞的機能がそれであり、所謂共同格としての機能がそれである。

Бид зоригтой байлдав.<我々は勇敢に戦った。>

この場合の зоригтой が副詞的機能である。

Та нар ахтай уулзав уу? <あなた方は兄と会ったか。>

この場合の ахтай が所謂共同格としての機能である。また、人称代名詞においても、надтай <私と>, бидэнтэй<私達と>, чамтай<君と>, тантай <あなたと>, та нартай<あなたたちと>, түүнтэй <彼(女)と>, тэдэнтэй<彼(女)たちと>というように、所謂共同格は、この接尾辞によってよく整備されている。

さて、接尾辞 -тай (-той, -тэй) に形式の上で対立的に共存している「-т」は、現代ハルハ蒙古語においては、限定的機能、叙述的機能、副詞的機能のいずれをも果しているのであるが、所謂共同格語尾としての機能は全く果していないこと、また「-т」の頻度は、現代ハルハ蒙古語においては、-тай (-той, -тэй) に比して、極めて小さいということだけをここでは確認して、この両者の関係の究明は、本接尾辞の歴史的発展の本質的な問題にもなるので、第 2 章の元朝秘

史の研究をまち、第3章においてふれるのが適当であると思うので、この章では省略することにする。

2

本章では、第1章で概観した現代ハルハ蒙古語の接尾辞「-т」「-тай (-той, -тэй)」が元朝秘史においてはどのようになっていたかを明らかにするのが目的である。諸説はあるが、元朝秘史は元の太宗の十二年(1240年)に畏兀児式蒙古字で書かれ、明の洪武(在位1363~1398)初年に漢字音訳されたといわれている。当時の蒙古語を原典にどのように反映できているのか、あるいは畏兀児式蒙古字から漢字音訳の際の正確度の問題、現存するものは漢字音訳本に由来する数種の刊本と写本だけであるという問題があるけれども、とにかく13世紀に成立したこの文献について考察することは、現代ハルハ蒙古語におけるこの接尾辞のベクトルを把握する上で極めて重要である。

ここでは清の文廷式鈔本を底本とする葉德輝刊行の「元朝秘史」10巻続集2巻のものと、Академия Наук СССР Институт Народов Азии から出版された15巻本元朝秘史の写真版をtextにして、正集全10巻について網羅的に、この接尾辞に関係あるものは考察した。

(1)

元朝秘史では、現代ハルハ蒙古語の接尾辞 -тай (-той, -тэй) は「合」であられ、接尾辞 -т は「秃」または「圖」であられるのであるが、先ずはじめに、この接尾辞は、元朝秘史においては、如何なるものに接尾するのか、その field と頻度について調べる必要がある。我々が、「～を持つ」というとき、まずその対象として考えられるものは、我々の感覚によって具体的に知得し得る物である。そして、思惟の対象となり得るのみで感覚によって知覚できないものについては、精神活動の発展の上に、「～を持つ」という概念の拡張によってはじめて可能な問題である。本稿で扱う接尾辞の意義素が「～を持っている～」であることを考えるとき、この接尾辞の語基を、(a) 我々の感覚によって具体的に知得し得る物、(b) 思惟の対象となり得るのみで感覚によって具体的に知覚出来ないもの、に分類して考えることは重要であると思う。そして、ここでは便宜上、(a) を表現するものとして具象名詞 (concrete noun)、(b) を表現するものを抽象名詞 (abstract noun) として二大別する。具象名詞としては：帖里兀<頭>、^ㄅ合勒

<火>、不^ㄅ合兀<手
枷>、秣^ㄱ驪<馬>、
阿赤阿<荷>……等で

ある。

抽象名詞としては：阿米＜生命＞，額^ᠡ児客＜威光＞，幹失＜讐＞，幹抹黒＜勇氣＞，薛惕乞勒＜心＞……等である。

抽象名詞を更に，主観的な情意を表現するところの名詞（b₁）と，それ以外の抽象名詞（b₂）に分類する。（b₁）とは，例えば＜悲しみ＞，＜痛み＞，＜興味＞，＜淋しさ＞，＜恋＞，＜暑さ＞……等主観的な感情・情意・感覚一切である。この（b₁）を設定したのは，第3章で現代ハルハ蒙古語と比較する上で必要であったからである。

その他に，この接尾辞が接尾されるものとしては，形容詞があげられる。これは，厳密に考えるならば，蒙古語には形容詞として，通常機能していながら，時として名詞として機能する語がしばしばあり，この場合の形容詞もこの種の形容詞であって，この接尾辞が接尾されたときには，形容詞としてよりもむしろすでに名詞として機能していると考えるのが妥当であると思う。しかし，この接尾辞が，品詞として流動的で不安定な分野にも，どの程度及んでいるかについても興味があり，また逆に，このように名詞と形容詞の両極間を動いている語が，元朝秘史においては，現代ハルハ蒙古語と較べてどの程度であるかについても，ある程度この接尾辞を通して窺うことができるので注目したのである。この接尾辞が接続するところのこのような形容詞を一応便宜上，形容詞（c）として考察を進めたい。

以上を整理すると，本稿で扱う接尾辞の接尾されるところの語基は，次のように分類される。

	具象名詞 (a)	
分類 I	抽象名詞 (b)	主観的な情意を表現するところの名詞 (b ₁) その他の抽象名詞 (b ₂)
	形容詞 (c)	

次に本稿で扱う接尾辞の文法的機能は，元朝秘史においてはどのようなものであるのか，このことを考察して整理しなければならない。勿論，ここでも「台」，「秃」，「圖」については個別的に考える必要がある。そのことによって始めて，これら三者の関係を明らかにすることが可能になるからである。

○……額別^ᠡ児秃 兀訥昆……（卷3） ～（例. 1） <……角ある羊……>

○……豁都台 雪泥……（卷10） ～（例. 2） <……星のある夜……>

例. 1において，額別^ᠡ児＜角＞，秃は，先にもふれたように現代ハルハ蒙古語における接尾辞 -t に対応するものであり，その意義素は接尾辞 -taii と同じように「～を持っている～」である。兀訥昆は＜羊＞である。例. 2においては，豁都は＜星＞であり，台は現代ハルハ蒙古語における接尾辞 -taii に対応する。雪泥は＜夜＞である。例. 1 の額別^ᠡ児秃，例. 2 の豁都台はいず

れも次にくる名詞に直接附加してこれを限定している。このような例.1, 例.2の場合をここでは限定的機能(A)として分類する。

○……朶羅安 納速禿一宜 篋⁵兒乞惕

亦⁵兒堅 倒兀里周…… (卷5)～(例.3)

＜……7才の子を, メルキット部の民は虜えて……＞

例.3において, 朶羅安は＜7＞, 納速は＜年令＞, 宜は＜～を＞, 篋⁵兒乞惕は＜メルキット部＞, 亦⁵兒堅は＜民＞, 倒兀里周は＜虜えて＞である。この場合, 問題になるのは納速禿であるが, これは本来は＜年令を持った～＞であって, 限定的機能をはたしていると考えられる。即ち, 朶羅安 納速禿一宜は朶羅安 納速禿 可兀一宜(可兀＜子＞)となるべきところであって, これを, 納速禿の後に可兀が省略されたものとして考えてしまえば問題はないのであるが, 現代ハルハ蒙古語においても, ахтайгаас ＜兄と一緒にいる人から＞(ах＜兄＞, гаас＜尊格＞), дүүтэйд ＜弟と一緒にいる人に＞(дүү＜弟＞, д(与位格))のような例があり, 「省略」として処理するよりも, 言語使用の歴史的過程における, 言語意識の発展に伴うこの接尾辞の意義素の拡張という観点から, この事実を把握することの方がより深められると思う。ただちに, 明確な結論が得られないにしても, このような観点から今後もこれを注目する意味で, 例.3の場合を, 限定的機能(A)から区別して, その中に一項目を設けて(A')とする。

○……阿合 阿合 別耶 帖里兀禿 迭額勒 札合禿 撒因 客額罷 (卷1)～(例.4)

＜……兄上, 兄上, 人間の身体に頭があり, 着物に襟のあるのは良いことです, といった。＞

○帖木真安答 米納 兀⁵里答察 乃蠻一突⁵兒額勒赤禿 不列額 (卷5) ～(例.5)

＜わがテムジン・アンダは, 昔からナイマン部に使者を往来していました。＞

○……孛羅勒歹一速牙勒必 札刺兀禿 答驛⁵兒 孛驛⁵ 孛豁牙⁵兒 曲驛兀惕 阿黑驛思禿 不列額 (卷1) ～(例.6)

＜ボロルタイ・ソヤルビと云う若者, それにダイルとボロという二頭の駿馬がいた。＞

例.4, 例.5, 例.6は, いずれも動詞と共に, あるいは単独で, 間接的に主語について叙述する述詞(predicative)として機能している場合で, ここではこれらを叙述的機能として分類する。この叙述的機能を更に下位区分することが可能である。例.4においては, 別耶 帖里兀禿は＜身体は頭を持っている。＞である。別耶は＜身体＞, 帖里兀＜頭＞であるが, 帖里兀禿が単独で predicative を構成している。例.5においては, 額勒赤禿 不列額は＜使者を持っていた。＞である。額勒赤は＜使者＞, 不列額は所謂 be 動詞の過去形であるが, 額勒赤禿は動詞と共になっ

て、predicative として機能している。例.6においては、札刺兀禿は＜若者を持っていた＞であって、札刺兀禿の後に不列額が本来はあるべきなのが省略されている場合である。これら叙述的機能を下位区分して、例.4の場合のように、単独で predicative として機能しているものを (B)、例.5の場合のように動詞と共に predicative として機能しているものを (B')、例.6の場合のように本来は動詞と共に predicative として機能すべきものであるが、動詞が省略されて単独のもの (B'') の三つに分類する。この三区分別は一見形式的であるが、次の理由からその必要を認めたのである。現代ハルハ蒙古語において、Мал бол айлд туйлын их ашигтай. ＜家畜は家庭生活に極めて重要である。＞、Тэр сайн хийцтэй.＜それはよくできている。＞……等の例のように、接尾辞 -тай の接尾された語が、単独で predicative として機能している場合が顕著にみうけられる。このことは結局、現代ハルハ蒙古語において、接尾辞 -тай の叙述的機能としての自立的傾向、就中叙述的機能としての power の大きさを示めしているものであり、元朝秘史と対比することによって、その歴史的傾向を把握できると考えたからである。この観点からすれば、叙述的機能の下位区分として、(B)、(B')、(B'') はここでは妥当であると思う。

。……秣^{ᠮᠣᠯ}驪禿 亦列罷一者 (卷6) ～(例.7) ＜……馬で来たのです。＞

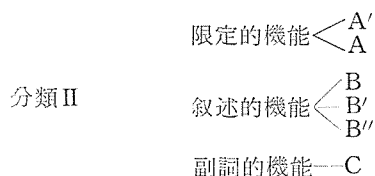
。迭格勒禿 朶劣克先 可温 必

阿主兀一者 (卷6) ～(例.8)

＜私は服を着たまま生れた子なのです。＞

例.7においては、秣^{ᠮᠣᠯ}驪は＜馬＞、亦列罷は＜来た＞であって、秣^{ᠮᠣᠯ}驪禿＜馬で＞は所謂副詞的機能をはたしている。例.8においては、迭格勒は＜衣服＞、朶劣克先は＜生まれた＞であって、迭格勒禿＜衣服を着たままで＞も、例.7と同じ機能をはたしている。現代ハルハ蒙古語においては、所謂副詞的機能をはたす接尾辞 -тай は極めて多いのであって、元朝秘史において、これを注目することは重要である。ここでは、例.7、例.8のように副詞的機能をはたすもの (C) を設定する。

以上の観点から、本稿で扱う接尾辞の元朝秘史における文法的機能について整理するならば、次のような分類になる。



分類Ⅰは、いわば、この接尾辞の接尾し得る field を考察するものであり、分類Ⅱは、その文

法的機能を明確にしようとするものであるが、分類Ⅰと分類Ⅱを総合的に考察することによって立体的な把握が可能である。

(2)

前節でまとめた分類Ⅰ、および分類Ⅱの視角を総合し、それを基準にして、元朝秘史正集10巻を網羅的に調べて、その頻度をB表の如く整理した。この接尾辞についての文例は、正集全10巻中232である。これらの文例は、B表の各欄(mA₁~oC₄)別に分類したものを、本稿の最後に添える予定であったが、紙面に制限があったので割愛した。

先にふれた如く、接尾辞「禿」(「圖」)は現代ハルハ蒙古語の接尾辞 -r に対応し、接尾辞「台」は接尾辞 -тай (-той, -тэй) に対応するのであるが、「禿」の頻度は180,「台」の頻度は46,「圖」の頻度は6であって、「禿」は全体の約78%を占めて圧倒的に多い。現代ハルハ蒙古語においては、この関係は逆転して、接尾辞 -тай は接尾辞 -r よりも問題にならぬほど大きく、接尾辞 -r は衰勢の一途を辿っているといえる。

この接尾辞の接尾する field について注目すると、具象名詞に接尾する頻度は162で全体の約70%である。この接尾辞の意義素が「～を持っている～」であることを考えれば、その対象として、我々の感覚によって具体的に知得し得る物を表現するところの所謂具象名詞の頻度の比率が大きいのは当然であるともいえる。しかし、抽象名詞の中でも、主観的な情意を表現するところの名詞(b₁)に、この接尾辞が接尾する頻度は、「禿」,「台」,「圖」の三つを通して、僅か mB₂ の1つである。この事実は極めて重要であり、(b₁)を設定したのも、この事実を数量的に明確に把握するためであった。これについては改めて第3章で深めることにする。

この接尾辞の文法的機能について注目すると、限定的機能の頻度が叙述的機能の場合より大きいことがわかる。これは現代ハルハ蒙古語においても、同じ傾向を示めている。しかし、副詞的機能の頻度は17で、全体の僅か7%にしか過ぎない。現代ハルハ蒙古語においては可成この分野においても発展している。現代ハルハ蒙古語の所謂共同格もこの副詞的機能の拡張的な発展と考えられる。これについても改めて第3章で深めることにする。

次に、この接尾辞の三形「禿」,「台」,「圖」の相違について考えてみたい。但し、「圖」は頻度が6であり、全体の2%にしか過ぎない。その上、文法的機能においても、意義素についても、「圖」は全く「禿」と同じで、音の上でも「禿」と「台」の間のような差異は認められないので、一応ここでは、「禿」と「圖」は同じ音を表記したものとして進めて行きたい。であるから、ここでは「禿」と「台」の相違について考えることになる。

B表からも分かるように、「禿」と「台」は文法的機能において差異を示していない。

(B表)

文法的機能			限 定 的 機 能		叙 述 的 機 能			副詞的機能	
			A	A'	文 B 末	B'	B''	C	
接尾辞の結合関係									
禿 (m)	具 象 名 詞 (a)		mA ₁ 62	mA' ₁ 7	mB ₁ 11	mB' ₁ 23	mB'' ₁ 7	mC ₁ 12	122
	抽象名詞 (b)	主観的な情意を 表現するもの (b ₁)	mA ₂ 0	mA' ₂ 0	mB ₂ 0	mB' ₂ 1	mB'' ₂ 0	mC ₂ 0	1
		それ以外 (b ₂)	mA ₃ 26	mA' ₃ 4	mB ₃ 5	mB' ₃ 11	mB'' ₃ 0	mC ₃ 2	48
	形 容 詞 C		mA ₄ 4	mA' ₄ 0	mB ₄ 2	mB' ₄ 2	mB'' ₄ 0	mC ₄ 1	9
台 (n)	具 象 名 詞		nA ₁ 22	nA' ₁ 3	nB ₁ 3	nB' ₁ 5	nB'' ₁ 0	nC ₁ 1	34
	抽象名詞	表現主体の情意 表現	nA ₂ 0	nA' ₂ 0	nB ₂ 0	nB' ₂ 0	nB'' ₂ 0	nC ₂ 0	0
		そ れ 以 外	nA ₃ 2	nA' ₃ 0	nB ₃ 4	nB' ₃ 1	nB'' ₃ 0	nC ₃ 1	8
	形 容 詞		nA ₄ 4	nA' ₄ 0	nB ₄ 0	nB' ₄ 0	nB'' ₄ 0	nC ₄ 0	4
図 (o)	具 象 名 詞		oA ₁ 3	oA' ₁ 0	oB ₁ 0	oB' ₁ 3	oB'' ₁ 0	oC ₁ 0	6
	抽象名詞	表現主体の情意 表現	oA ₂ 0	oA' ₂ 0	oB ₂ 0	oB' ₂ 0	oB'' ₂ 0	oC ₂ 0	0
		そ れ 以 外	oA ₃ 0	oA' ₃ 0	oB ₃ 0	oB' ₃ 0	oB'' ₃ 0	oC ₃ 0	0
	形 容 詞		oA ₄ 0	oA' ₄ 0	oB ₄ 0	oB' ₄ 0	oB'' ₄ 0	oC ₄ 0	0
			123	14	25	46	7	17	232

mB''₁ = 7 に対して、nB''₁ = 0 であり、また「禿」の副詞的機能の頻度15に対して、「台」のそれは2となっていて、「台」の方が少ないので、文法的機能において差異が認められそうだが、これは、「禿」全体の頻度が180に対して、「台」のそれは46で、全体的にいて「台」は「禿」の約1/4であるということから生まれた部分的な現象であって、B表からも明らかのように総合的に云って、そのことは覆されないとと思う。

また、B表からも分かるように、「禿」と「台」の接尾辞が接尾する語基の種類によっても、両者の差異は認められない。

また、この接尾辞の前後の音声的環境によって「禿」と「台」は、その選択を決定されるのかどうかを調べたが、これも法則的なものはなんら得られなかった。

この両者の接尾辞の意義素は、今まではいずれも、「～を持っている～」として、概略的に考えてきたが、この両者の差異を考える段階ではもっと厳密にする必要が認められる。

。中合阿 幹暢中忽 帖^音判 不^中合兀禿 古温 (巻2) ～(例.9)

<何処へ行かれるものですか、あの手枷をした人は。>

。……農^中合速禿 帖^音兒干一圖^音兒…… (巻2) ～(例.10)

<……羊毛を積んだ車に……>

○……秣^ㇿ驪秃 古温…… (巻2) ～(例.11)

<……馬に乗った人……>

○……你刊 中忽刺安 迭額勒秃

額篋 古温…… (巻4) ～(例.12)

<……一人の紅い衣を着た婦人……>

○……兀^ㇿ忽^ㇿ兒^ㇿ合秃 忽闌……(巻8) ～(例.13)

<……馬捕竿をかけられた馬……>

例.9においては、不^ㇿ合兀秃は<手枷をした～>であるが、本来人間は手枷をしているわけではなくて、一時的に手枷をしているわけで、この場合の「秃」は極めて不安定で一時的な意味での、「～を持っている～」という意義素である。例10においても、農^ㇿ合速秃は<羊毛を積んだ～>であるが、これも車に本来あるべきものではなくて、一時的な不安定な状態での場合である。例.11においても、秣^ㇿ驪秃は<……馬に乗った～>であるが、人間は常に馬を「～持っている～」わけではなく、やはり一時的で不安定な状態での所属関係を表わしている。例.12においても、迭額勒秃は<衣を着た～>であるが、その紅の衣を常に着ているわけではなくて、やはり一時的で不安定な意味での「～を持っている～」という意義素である。例.13においても、兀^ㇿ忽^ㇿ兒^ㇿ合秃は<馬捕竿をかけられた～>であるが、これも、馬がもともと馬捕竿を首にかけているわけではなく、偶々かけられたのであって、これもやはり一時的で不安定な状態での所属関係を表わしている。

以上、例.9,例.10,例.11,例.12,例.13の接尾辞「秃」についての5例に共通する点は、いずれも、一時的で不安定な意味での「～を持っている～」という点である。そして、接尾辞「秃」の意義素を厳密にするならば、今の5つの例の如く考えて間違いないものといえる。

次に「台」について考えると：

○……敦荅 客額里台 額篋一宜 把里周…… (巻1) ～(例.14)

<……胎児をはらんでいる婦人を抱え……>

○……完勒只格台 帖^ㇿ兒堅一圖兒 (巻1) ～(例.15)

<……室のある車に……>

○……擲^ㇿ幹^ㇿ兒^ㇿ合台 帖^ㇿ兒格泥…… (巻3) ～(例.16)

<……錠の下してある車を……>

○……額兀列台 雪泥…… (巻10) ～(例.17)

＜……雲のある夜……＞

例.14においては、客額里台は＜胎児をはらんでいる～＞であるが、体内でもあり、かなり長期間でもあるので安定な状態での、「～を持っている～」を表わしている。例.15においては、完勒只格台は＜室のある～＞であるが、例.10の「羊毛」の場合とは違い、車の一部分を構成しているものであり、極めて緊密であって、安定な状態での所属関係を表わしている。例.16においては、撓斡兒¹⁴台は＜錠の下してある～＞であるが、これは一時的ではあるが、これは錠の固さを強調して用いた場合であると考えられる。例.17においては、額兀列台は＜雲のある～＞であるが、これも一時的ではあるが、空一面に雲が覆っている安定した状態を表わしている。例.14の胎児の場合と同じように何か定着した存在の意も同時に含んだ状態を表わしている。以上をまとめると、接尾辞「台」の意義素は、厳密に云って、安定した状態での「～を持っている～」である。

接尾辞「秃」、¹⁵「台」の相違点は、結局、その意義素にあり、前者は所属、所有の度合が大きく、安定しており、後者の場合は、その度合が小さく、不安定であるということになる。しかし、ここで扱った例.9～例.17の9つの例は、両極を明確に位置する代表的な例であって、その中間にあるもの、あるいは「秃」であるべきところに「台」であったりする例も多少あり、一概にはそのように云えない混乱の面もある。一概にそのように云えない混乱の面もあるということは、結局は、接尾辞「秃」、¹⁶「台」の言語的發展の歴史的縦の過程を、元朝秘史の時点での横断面で、平面的に考察したためであって、発展的にとらえれば、この両者のベクトルの明確な法則性を見出すことも可能であろう。であるからして、混乱として処理するのは妥当ではないと考える。これについては、第3章で現代ハルハ蒙古語と比較することによって、それらの歴史的発展過程を明らかにし、そのなかで深めることにしたい。

3

この章では、前章の元朝秘史の時点での横断面における平面的考察によって把握された、共時的言語事実に対して、更に現代ハルハ蒙古語と比較することによって、立体的視点からの照明を与えようとするものである。そして、そのことによって始めて、本稿で扱った接尾辞の歴史的発展過程を辿り、現代ハルハ蒙古語における、この接尾辞の占める位置とそのベクトルを明確にすることが可能である。

(1)

第2章B表によれば、元朝秘史においては「秃」の頻度が180であり、「台」の頻度は46であっ

て、「禿」の頻度は「台」の頻度の約4倍で、圧倒的に大きいことがわかる。ところが、現代ハルハ蒙古語においては、「禿」に対応するところの接尾辞 -т は、「台」に対応するところの接尾辞 -тай (-той, -тэй) に比して、そのあらわれる頻度は丁度元朝秘史の場合とは逆転して、問題にならぬほど小さいのである。換言すれば、元朝秘史の時点においては、接尾辞「禿」は「台」に比して優勢であったが、歴史的時間の経過とともに、現代に近づくに従って、劣勢になってきたということがいえる。そして、接尾辞「台」は、元朝秘史の時点では、「禿」に比して劣勢であったが、現代に至って、「禿」に代って優勢な地位を占めるに至ったといえる。その頻度の歴史的推移が象徴するように、現代ハルハ蒙古語において接尾辞 -тай (-той, -тэй) は文法的機能においても極めて活性であり、限定的機能のみならず、叙述的機能、副詞的機能においても、また所謂共同格語尾としても極めて重要な役割を果している。ところが、接尾辞 -т は、叙述的機能や所謂共同格語尾としてはその役割を果し得ず、殆ど限定的機能としてのみ働いているに過ぎない。また、галт тэрэг<汽車>、цаст уул<雪山>が、それぞれ галтай тэрэг、цастай уул にはならないことから考えても、接尾辞 -т の意義素は接尾辞 -тай のそれに比して、極めて弱まっていることがわかる。現代ハルハ蒙古語の接尾辞 -т に対応する「禿」は、元朝秘史においては、第2章B表が示めす如く具象名詞に多く接尾しているのであるが、むしろ現代においては、それが抽象名詞に多く接尾するように変化しているのも、今述べたこの接尾辞の意義素の相対的弱化的歴史的現象と並行する現象と考えるとよいのではないだろうか。

次に、この接尾辞の発展的用法である所謂共同格語尾について考察したい。

Та нар ахтай уулзав уу? (例.a)

<あなたたちは兄と会ったか。>

Би чамтай тосгонд гаралцана. (例.b)

<私は君と村へ出発する。>

(例.a)、(例.b) の ахтай<兄と>、чамтай<君と>が現代ハルハ蒙古語における所謂共同格で、人称代名詞においても、надтай<私と>、бидэнтэй<私たちと>、чамтай<君と>、тантай<貴方と>、та нартай<貴方たちと>、түүнтэй<彼(女)と>、тэдэнтэй<彼等と>の例が示すように、よく整備されている。ところが、元朝秘史においては、第2章の研究で既に明らかになったように、この接尾辞による所謂共同格語尾が、このような形には発展していないのである。ここで問題になるのは、この共同格語尾の発展過程であるが、それを考察するには、元朝秘史における接尾辞「台」、「禿」の副詞的機能に注目する必要がある。

○……^中忽^兒班 那可^兒禿 你刊

古迭兀一宜 荅合兀勒周…… (巻9) ～(例.c)

<……3人の友をつれて、その

弟1人を従え……>

○……秣^驪禿 亦列罷一者 (巻6) ～(例.d)

<……馬で来たのです>

(例.c)において、那可^兒禿は<友を持って>の意であり、(例.d)において秣^驪禿は<馬を持って>の意であって、いずれも副詞的機能を果している。考え方によっては、元朝秘史においてこのように副詞的機能を果しているこの接尾辞を、現代ハルハ蒙古語における所謂共同格語尾とみなすことができるのであるが、第2章B表からも明らかなように、副詞的機能は頻度において全体の僅か7%であり、また現代ハルハ蒙古語では人称代名詞の共同格が上述の如く整備されているのに対して、元朝秘史においては絶無であること、およびこの接尾辞の意義素自体が内包している発展への契機を考え合せると、やはり現代ハルハ蒙古語の所謂共同格語尾は、元朝秘史におけるこの接尾辞の副詞的機能が発展的に拡張されたものであり、元朝秘史における前述の(例.c)、(例.d)の如き場合は、その萌芽であると云える。

次に述べておかねばならないことは、現代ハルハ蒙古語において、極めて頻繁にあらわれる次の(例.e)～(例.i)の用法である。

Та Улаанбаатар хотод очих хэрэгтэй. (例.e)

<あなたはウランバートル市にいかねばならない。>

Би уснд орох санаатай. (例.f)

<私は水に入るつもりだ。>

Би идэх дуртай. (例.g)

<私は食べたい。>

Хурал болох ёсгой. (例.h)

<集会は開かれるべきだ。>

Бороо орох маягтай. (例.i)

<雨が降りそうだ。>

(例.e)において、очих хэрэгтэй は<行くことを持っている>→<行かねばならない>。

(例.f)において、орох санаатай は<入る意志を持っている>→<入るつもりだ>。(例.g)

において、идэх дуртай は<食べる欲望を持っている>→<食べたい>。(例.h)において、

болох ёстой は＜開かれる道理を持っている＞→＜開かれるべきだ＞。(例.i)において、
 орох маягтай は＜降る様子を持っている＞→＜降りそうだ＞。上記の(例.e)～(例.i)は、
 いずれも抽象名詞にこの接尾辞が接尾して、慣用的な表現形式をつくりだしているのであるが、
 元朝秘史においては、このような例は極めて稀で、亦嗒古 約速台＜食べるべきだ＞の1例のみで
 あった。次節で考察するのであるが、この接尾辞の歴史的発展の元朝秘史の段階において、この
 ような表現形式が充分完成されていないと考えるのは極めて容易であり、また、事実として、そ
 の例が元朝秘史において1例に過ぎなかったということも充分頷けるのである。それはともかく
 として、現代ハルハ蒙古語において、この表現形式が盛んに使われている点からも、この接尾辞
 は極めて重要な地位を占めるに至っていると云えるのである。

(2)

主観的な情意を表現するところの名詞、即ち第2章分類Iの(b₁)を語基とする形容詞は、元
 朝秘史においては、第2章B表からも明らかなように、僅か次の1例に過ぎない。

○……必 丹一突^兒 斡羅忽

都^刺秃 不列額 (卷4) (例.j)

＜私はあなた方に投降しようと思っていたのです＞

それに引換え、現代ハルハ蒙古語においては、この分類Iの(b₁)を語基とするこの接尾辞によ
 る形容詞は極めて多い。次はその例である。

аюул＜恐れ＞+‑тай→аюултай ＜おそろしい＞

гуниг＜悲しみ＞+‑тай→гунигтай ＜悲しい＞

сонирхол＜興味＞+‑той→сонирхолтой ＜面白い＞

例 A

дур＜好み＞+‑тай→дуртай ＜好きな＞

жаргалан＜喜び＞+‑тай→жаргалантай ＜楽しい＞

ичгүүр＜恥＞+‑тэй→ичгүүртэй ＜恥かしい＞

両時点におけるこの種の形容詞の頻度のそのような差異は、やはりこの接尾辞の発展段階を示す
 一つの指標となり得るものである。

また、前述の例Aに属する形容詞の中に、注目すべき現象がある。

Би танд дуртай. (N+D+P. a) (例.k)

Надад энэ ном сонирхолтой. (D+N+P. a) (例.l)

(例.k)において、Би は第1人称主格であり、танд は第2人称主格であって、結局(例.k)は、
 主格(N)+与格(D)+叙述形容詞(P. a)の文型であり、(例.l)において、надад は第1人称与

格であり、энэ ном は主格であって、結局 (例.l) は、与格(D)+主格(N)+叙述形容詞 (P. a) の文型になるのであるが、形式論理的に考えれば、(例.l) は Би энэ номд сонирхолтой. (N+D+P. a) として、(例.k) と同じ文型であっても一向に差支えないのである。しかし、実際にはそうならないのである。ではなぜ (例.k) と (例.l) のような二つの型が現われたのであろうか。これは、第2章分類 I の (b₁) 即ち主観的な情意を表現するところの名詞を語基として、この接尾辞によって形成されるさまざまな形容詞の間に生ずる差異に問題があるのであって、ここでは дуртай と сонирхолтой の差異に注目する必要がある。дуртай は (例.k) においては、主観的な情意の表現であるから、情意の主体であるところの Би が主語でなければならない。ところが、сонирхолтой は (例.l) においては、主観的な情意の表現であると同時に、ном の属性を表現したものである。このように、属性と情意の総合的な表現をする形容詞が、そのうち一方が顕現化すれば、それに応じた格を他に要求するのは充分考えられることで、(例.l) の場合は сонирхолтой の属性表現が顕現化したために、ном は主格に立ったと考えられるのである。以上の如く、現代ハルハ蒙古語には、第2章分類 I の (b₁)、即ち主観的な情意を表現する名詞を語基として、この接尾辞によって形成される形容詞は極めて多く、しかも (例.k)、(例.l) の如く、これらの形容詞の中には、主観的な情意のみを表現する形容詞と、属性と情意の総合的な表現をする形容詞の二つの group が生まれ、後者は総合的な表現であるために、言語使用の時間的経過と共に、属性と情意の間の重点の移動が起り、それが syntax の面にも影響を与えて来たのであり、また将来も影響を与えて行くであろう。

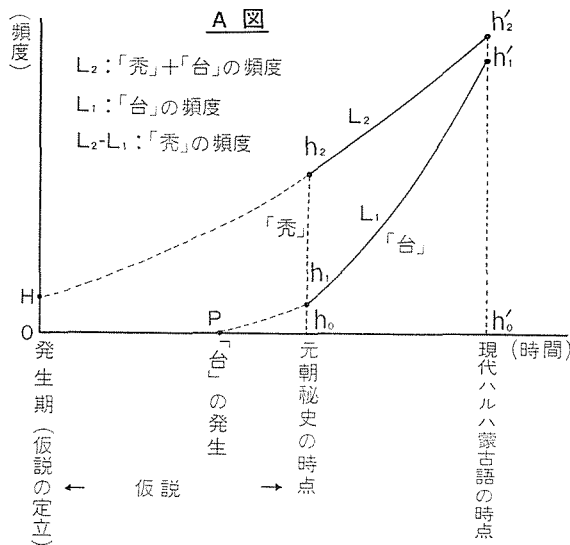
この接尾辞の歴史的発展過程において、この接尾辞のあらわれる頻度の単なる量的増大のみにとどまらず、接尾する語基の field の拡張が行われ、今みた第2章分類 I の (b₁) にまで及び、それが syntax に影響を与えるに至っている点は、文法構造の歴史的発展に、部分的ではあってもなんらかの形で、言語構造自体が内包する内的規制力として、規定的役割を果している意味で、極めて注目し値するところである。

(3)

さて、接尾辞「秃」,「台」の発生期より現代の時点に至る歴史的発展過程について、首尾一貫した理論的解明を行う必要がある。先ず確認しておかなければならないことは、我々の実証的な研究が可能なのは、元朝秘史の時点より現代の時点に至る時期であり、元朝秘史より古い時代については、我々は現在のところ実証的な研究を可能にするに足る、まとまった資料を持っていないということである。従って、元朝秘史より発生段階に至る時期については飽くまでも仮説であって、有効な資料が発見されてはじめて検証される性質のものである。

元朝秘史の時点における、接尾辞「秃」、「台」を合せた総頻度 h_0h_2 (A図)は、第2章B表からわかるように232である。「秃」、「台」にそれぞれ対応する現代ハルハ蒙古語の接尾辞「-т」, 「-тай (-той, -тэй)」を合せた総頻度 $h'_0h'_2$ と h_0h_2 とを比較するならば、圧倒的に前者の頻度が増大していることを確認できる。この量的な増大に並行して文法的機能においても

広範な発展をしていることは既にみたところである。



「秃」と「台」との間の量的関係の歴史的推移については、元朝秘史の時点においては、第2章B表からわかるように「秃」の頻度 h_1h_2 と「台」の頻度 h_0h_1 の比は180:46であるのに対して、我々は現代ハルハ蒙古語の時点において、それがもっと大きな比率で逆転していることを確認することができる。即ち、元朝秘史の時点で、この接尾辞全体の僅か1/5を占めていたにすぎない「台」が、現代の時点においては、この接尾辞全体のほとんど大部分を占めるに至ったのであ

る。結局、この接尾辞は、次のような歴史的発展過程を辿ったものと考えられる（本節、A図参照）。元朝秘史の時点では、「秃」は「台」に圧倒的な優勢を保っていたが、次第に「台」が頭角をあらわし、「秃」を抑えて勢力を伸ばし、遂には現代ハルハ蒙古語においては逆転して、「台」は「秃」に代って、圧倒的優勢の地位を占めるようになった。そして、「秃」は衰退の方向を辿っているのである。

ではなぜこのような歴史的発展過程を辿ったのであろうか。第2章の考察で明らかにした接尾辞「秃」と「台」の意義素の差異に、この問題解明への重要な鍵があると確信する。元朝秘史の時点における「秃」の意義素は、要約すれば、所属・所有の度合の小さい、不安定な状態での「持っている」であり、「台」のそれは、所属・所有の度合の大きい、安定な状態での「持っている」であった。

さて今ここで、元朝秘史以前のこの接尾辞の発生期の段階においては、この「秃」と「台」は共存していなかったという仮説を定立したい。即ち、「秃」のみ（OH, A図）が存在していたと

考えるのである。更に明晰に発展的な観点から述べれば、この接尾辞はもともと「禿」として、単独の形式において発生したという仮説を定立したい。そして、発生期の「禿」は、文法的機能としては、限定的機能にのみ限られていたと考えられる。また、その意義素においても、その発生期の「禿」は、元朝秘史の時点で「禿」が「台」に相対的に占めていたその位置よりも、更に弱い極に位置する意義素を有していたものと思われる。ところが、「禿」の使用の時間的経過にしたがって、所属・所有の度合の大きい、安定な状態での「持っている」の表現の要求に応じて、「禿」に二重母音の加わった「台」が、その要求を満たすようになったのが、「台」の発生(P, A図)であると考えるのである。このことは、意味と形式との相互関連の基本的な捉え方にもなってくるのであるが、それを一般的・理論的に整理すれば、次のようになるであろう。即ち、ある形式によって表現すべき意味を数直線に譬えれば、形式は、実にこの数直線によって示めされる、さまざまな段階の意味の連続性・無限性のある特定の部分を、限られた範囲において固定しようとする線分であって、表現は正にこの線分内に属するものと、その外にある部分との矛盾として成立しているものである。従って、このような観点からすれば、接尾辞「禿」には、発生 of 段階よりそれ自体のなかに、既に内的に矛盾する側面・傾向が本来ぞくしていたのであり、その矛盾の形式への顕現化として「台」の発生を考えるのである。ここに、この接尾辞は明確な形において、対立物を内包するに至るのである。

ひとたび、対立物としての「台」が発生すると、「禿」よりも強制的なその意義素の故に、「禿」を駆逐する傾向を示し、その勢力を増大していくのである。元朝秘史の時点は、可成この現象の進行した(h_0h_1 , A図)時点であり、したがって、第2章で考察したように、「禿」と「台」の間で、その意義素、用法において混乱の面があると映じたのも、対立物としての両者の歴史的発展過程の、そのような発展段階の時点での横断面における、平面的で固定的な観点からの考察であったためである。この時点では、第2章B表からも明らかなように、「台」(h_0h_1 , A図)は可成勢力を増大し、量的には、この接尾辞の総頻度数の約 $\frac{1}{5}$ (h_0h_1/h_0h_2 , A図)までに進出している。そして、文法的機能においては、発生期の時点では「禿」が限定的機能のみを果しているに過ぎなかったものが、元朝秘史の時点では第2章B表からもわかるように、限定的機能、叙述的機能、副詞的機能として、「禿」、「台」いずれも発展しているし、また、副詞的機能のなかに、現代ハルハ蒙古語の所謂共同格語尾への萌芽が認められるに至った。さらに時代が進み、現代ハルハ蒙古語の時点に至ると、「台」($h'_0h'_1$, A図)は量的にも遂に「禿」($h'_1h'_2$, A図)を大部分駆逐し、文法的機能においても、既にみてきたように膠着の状態に追い込んでしまったのである。現代ハルハ蒙古語における所謂共同格語尾の機能を、「台」のみが果し、「禿」が果し

得なくなった事實は、このことを何よりもよく物語っている。

この接尾辞の発生より現代に至る歴史的発展過程において、新しく発生した「台」は、一貫して増大し、遂に古い「禿」に代って、現代ハルハ蒙古語において、その頻度においても、文法的機能においても目覚しい発展を遂げているのであり、「禿」は衰退の方向を辿っているのである。そして、具体的で詳細な道筋を予測するのは危険でもあり、無意味でもあるが、極めて遠い将来において、「禿」が消滅するであろうと予見するのは、さして困難ではなかろう。

現時点での固定的で平面的な考察によってしては、一見混沌としているこの接尾辞の両者も、歴史的時間の縦の軸において発展的に把えるならば、それぞれはそのめざす明確な運動の方向を持ち、その運動の明確な原因を内在して、絶えず運動を続けていると云えるのである。自然における物質のもっとも小さな粒子の運動からはじめて、複雑な人間社会の過程にいたるまでの、客観的世界のあらゆる事物、現象の発展を抽象し反映している弁証法の基本法則の重要な一つである、対立物の統一と闘争との法則が、実にあざやかに、この接尾辞の歴史的発展過程に首尾一貫してあらわれている。まさに、この言語現象の特殊性のなかに、その普遍的法則の具体的例をみることができるのである。

お わ り に

以上、元朝秘史の時点での横断面における考察によって把握された、共時的言語事実に対して、現代ハルハ蒙古語を比較することによって、立体的視点からの照明を与え、更に元朝秘史以前の発生期の段階の状態について、仮説を定立し、そのことによって、接尾辞「禿」、「台」の発生から現代に至る首尾一貫性のもとに、歴史的発展過程を解明してきたのである。その結果、現代ハルハ蒙古語における、この接尾辞の占める位置と、その将来へのベクトルを可成明確にすることができた。

上述の方法の基本は、第1章で簡単にふれた形容詞形成の接尾辞 $(n_1) \sim (n_3)$ および $(v_1) \sim (v_7)$ についても、同様に、具体的に適用することが可能であろう。この方法によって、それらの個々について、歴史的時間の縦の軸にそって、その発展の相を明らかにし、それらの相互の張合について考察する必要がある。こうしてはじめて、本稿で扱った接尾辞即ち (n_3) についても、体系の広がりの中かで、更に一段とその歴史的発展過程を明らかにして、その性格と本質を浮彫にしていかなければならない。

さて、本稿を結ぶに際して、上述の課題と合わせ次の問題を提起しておきたい。人称所有語尾

нь および чинь が本来の姿から離れて、主格表示の機能へ発展している問題、および論理的には主格が当然立つべきところに、他の格が立っているというような問題を含めて、現代ハルハ蒙古語には、格について注目すべき現象がある。この現象は、言語社会の思惟構造が、長い歴史的発展過程のなかで、論理性を帯び、明晰になるに従って、それを反映して、言語の表現形式においても前論理的な段階から論理的方向への発展が行われ、文構造の古い前論理的な基層と、このような新しい発展との矛盾としてあらわれている現象であろうと思われる。しかし、これについては、その格の顕在性、潜在性を問わず、格全般に亘って、言語の本質的なところでの、具体的で緻密な解明を待たなければならない極めて重要な、また、研究が多岐な分野に亘り困難が予想される問題である。それだけにこの問題は、現代ハルハ蒙古語の時点での平面的な考察では真の解明は不可能であって、「元朝秘史と現代ハルハ蒙古語」というこの論題の一環として、本稿で適用した方法の欠陥と成果を今後さらに検討し、それをその範疇の特殊性に発展的に適用することによって、解明していかなければならない今後の重要な課題の一つである。